

②機械処理水による生息・生育環境の変化

機械処理水による重要な種の生息・生育環境の変化は、図-6.10.2(13)に示す排水地点より下流において生じるものと考えられる。また、排水地点より下流に生息する重要な水生生物は表-6.10.2(7)に示す44種であり、機械処理水がこれらの重要な種の生息・生育状況に変化を及ぼすことが考えられる。

ここで、轟川におけるSS濃度の調査結果の概要及び混合濃度の予測結果を表-6.10.2(6)に示す。

平常時（ケース1）におけるSS混合濃度は13.1mg/Lとなっており、現況河川のSS濃度（1.9mg/L）と比較して高い値となる。しかしながら、現況河川よりSS濃度が高くなる期間は最大でも約10日間程度と想定されること（降雨終了後に轟川が平常流量に戻った時点で機械処理設備を稼働させる。南側仮設調整池が満水時においては、機械処理設備の能力からすると、最大でも約10日間で調整池の濁水の排水処理が完了するものと想定している）、混合後の濃度である13.1mg/Lは「水産用水基準」のSS濃度25mg/L以下を下回ることから、機械処理水による重要な種の生息・生育環境の変化は極めて小さいと考えられる。

降雨時（ケース2及び3）については、混合後のSS濃度は現況河川のSS濃度を下回っており、河川水のSS濃度を希釈させることから、重要な種の生息・生育環境の変化はないものと考えられる。

なお、凝集剤は、事業の計画検討に当たって講ずる環境保全配慮として、施工時点において可能な限り水生生物の生息・生育環境に影響の少ないものを選定することから、重要な種の生息・生育環境の変化は極めて小さいと考えられる。

表-6.10.2(6) 轟川におけるSS濃度の予測結果

予測ケース	現況河川		機械処理設備からの排水		混合濃度 (mg/L)	水産用水基準 (mg/L)
	SS濃度 (mg/L)	流量 (m ³ /s)	SS濃度 (mg/L)	水量 (m ³ /s)		
1 平常時	1.9	0.106	25	0.1	13.1	25
2 降雨時	274.0	2.396			264.0	
3	2,520	20.127			2,507.7	

注) ケース1：平成13年度四季調査結果における最小のSS濃度及び流量時

ケース2：機械処理水の排水地点（St. E）における現地調査での最大のSS濃度及び流量時

ケース3：平成13、14年の現地調査結果から、流域での最大SS濃度（St. B）と、河川流量の最大日流量時（St. H）。